

ドイツで今考えていること
経験していること

—明治学院およびキリスト教
研究所の創立記念に寄せて—

畠山 保男

ドイツのノルトライン・ヴェスト
ファーレン州ルール地方に位置
する、ヴッパータールにある教会

立神学大学に3月末にやってきました。それから半年の時があつという間に閱しました。いささか焦り始めています。ヴッパータール神学大学は単科の大学ですし、1933年にナチスが政権を奪取した年に設立された、比較的歴史の新しい大学です。このナチズムに追随してドイツ民法の法（ノモス）と神の律法（トーラー）とを一体視し、教会を内側から人種差別を骨格とするナチズムの世界観に変えようとしたのが、あるいは教会の側からナチズムに対応しようとしたのが、ドイツキリスト者と自称した人々の運動でした。それに対してドイツ福音教会の内部で少数派として、民族主義や人種差別主義とは対極のところに位置する福音を守ろうとしたのが、「告白教会」を形成した神学者や教会人だったのです。この「告白教会」の第一回教会総会が、ここヴッパータールのバルメン地区にある「バルメン・ゲマルケ教会」で開催され、そこで有名な「バルメン神学宣言」が起草され、発表されたのです。（この教会は改革派の伝統を持つ教会でしたが、現在はルター派との合同教会です。）そのような状況下にあつて自分たちの神学教育のために告白教会は、半ば違法な形でベルリンとヴッパータールに神学校を設立せざるを得なかったのです。しかしこの二つの神学校もやがて閉鎖させられ、やむなく告白教会はフィンケンヴァルデに牧師研修所を造り、その所長として責任を負うことになったのが、後にヒトラー暗殺計画に連

座して処刑された、D・ボンヘフファーでした。そこもまたゲシュタポにより、閉鎖の憂き目を見たわけです。

かつて学位論文を抱えて、出口の見えない森の中を彷徨っていた感のあるバーゼル時代の4年間とは異なり、今回は精神的には非常に楽な気分で、ドイツでの研究生を送り、新しい出会いを楽しんだり、将来のために関係を構築したりしています。それが証拠に、かつてスイスの国境の街バーゼルからドイツへ旅立ったときの目的地は、いずれも大学のある街でした。研究のことが念頭を離れず、旅行をする気になれず、クリスマス休暇とか2、3の例外を除いて、旅をしても研究とどこかで絡むような調査の出来る街へ行つたものでした。私が気分転換の下手な人間であると自認しているのも、こういう体験から来ています。それが今回は、4月早々に南西ドイツ福音宣教局とベルリン宣教局の共催になる「東アジア神学生の会」に出席して語り合い、5月に韓国のソウルで開催された「アジア神学者創立会議」に出席し、6月にはライプチヒで開催されたドイツ福音教会の「教会大会」に参加して、集中的にユダヤ教とキリスト教の対話に関する講演を聴き、また海外宣教会の展示会場に出かけて話し合ったり、さらに7月にはベルリンで二年に一回催される「夏大学」に出席し、初めてユダヤ教のラビたちに出会い、ユダヤ教とキリスト教の対話を学んだり、9月にはブレーメンで開かれた、

ナチ時代の教会の罪責告白である「ダルムシュタット宣言」50周年の研究会に出席したり、また恩師ですでに引退されているJ・M・ロッホマン先生をバーゼルに訪ねたり、チューリッヒで思いがけず中世以来の伝統を持つ、最古のプロテスタント教会である北イタリアのヴァルドー派教会出身の教会史の教授に出会って親しくなったり、何人かのドイツの教授に出会ったり、訪ねて行ったり、とかなり行動半径を広げながら日々を過ごしています。来週10月6日から4日間のドイツ東アジア宣教会の集会では、聖書研究を担当します。また夏休みには家族と共に、3週間ほどドイツの旅をしながら経巡りました。子供たちにとっては、異文化体験とし記憶に残る夏休みだったはずですが。このほかにもハイデルベルクやゲッチンゲンそして再度ベルリンなどで何人かの教授に出会う予定があります。また来年2月中旬にイスラエルへ行き、エルサレムで開催されるユダヤ教とキリスト教の講座に出席するつもりです。その講師がこのヴッパータールの組織神学者B・クラッパート教授なので、一緒に行くことになりました。「バルト・ボンヘッファーの線」ということが現代神学において言われますが、その両者の神学をホロコースト以後の神学として現代に生かそうとしている神学者の一人です。

なぜキリスト教神学にとってユダヤ教が問題なのか、ということですが、反ユダヤ主義・反セム主義の神学的な根っこを撃つことな

しに、六百万のユダヤ人犠牲者を出したホロコースト以後に神学することは、全く不可能だからです。つまり、ユダヤ人は神の子イエス・キリストを十字架に架け、神に逆らったが故に、救いの約束から自ら落ちこぼれて、替わって教会が「新しいイスラエル」、「新しい神の民」になった、という1500年以上にわたるヨーロッパ教会主流の自己理解が、神学的反ユダヤ主義の根幹なのです。福音書の受難物語に明らかなように、イエスに敵対する一部のユダヤ人が彼を亡き者にせんとしたことは事実ですが、それを拡大解釈し、一般化して彼の時代の全てのユダヤ人を、そればかりか全ての世代のユダヤ人をイエスの敵対者と見なすことがいかに誤りであるか、という認識から私たちは出発すべきなのです。神がイスラエルとの契約を取り消し、教会が替わって立てられ、「新しいイスラエル」になった、なんぞということは聖書のどこを探しても書いてありません。それは誤った理解であり、イスラエル（それゆえにユダヤ人）との神の契約を、教会が勝手に否定し、自分たちだけが神の民であると理解し、「教会の外に救い無し」として自らを誇る、教会の罪深い自己理解なのです。「イスラエル」が聖書的に教会を指示することは一度もなく、教会はイスラエルではないのです。そもそもイスラエルが根っこであり、ユダヤ人とユダヤ人キリスト者とはこの根っこから直接生え出した枝であり、異邦人キリスト教会は接ぎ木された枝

であり、この根っこから養分を吸っているのです（ローマの信徒への手紙11章17-24節参照）。

ユダヤ人はそれゆえにキリスト教会にとって、回心してキリスト者になることで救われる宣教の対象ではなく、対話の相手なのです。なぜならば、イスラエルと教会とが、一つの「神の民」の異なる二つの在り方を構成していると理解する限りは、ユダヤ教はイスラエルの伝承と信仰を現在に至るまで豊かに継承してきた神の民である、と結論づけるほかにないからです。しかもこの対話を必要としているのは、最初から神の契約の内に置かれているユダヤ教ではなく、むしろ根っこに接ぎ木された（非ユダヤ人）キリスト教会なのです。それはもう一つの「アブラハム宗教」としてのイスラムにも妥当するでしょう。イスラムもまたユダヤ教との対話を必要としているのであって、その逆ではないからです。この教会にとってのユダヤ人問題を私はクラッパート教授から1989年6月にプラハで問われ、それ以来この問題を考えてきています。それまで私は告白教会の神学的な闘いに深い関心を抱きながらも、神学におけるユダヤ人問題が現代神学の根幹に関わる事柄であるということを、自分の神学的実存において捉えることが出来ていなかったのです。

この一年間の研究が今後10年間の私の神学研究と神学的実存の基礎付けをする、という予感をひしひしと感じています。予定説によってユダヤ教否定に走った人々も

いますが、明治学院の建学の精神の基礎をなすカルヴァン派神学は、一番ユダヤ教に親近感をもって来たということを、学院とキリスト教研究所の創立記念に際して、述べておきます。

（はたけやま やすお

所員、一般教育部助教授）

*97年度ドイツにて在外研究中